特定非営利活動法人 A SEED JAPAN 第 8 回通常総会議事録

１．開催日時 2021 年 6 月 19 日（土） 14 時 00 分～17 時 00 分
２．開催場所 オンライン（Zoom 利用）
３．出席状況 正会員総数 93 名 有効数 51（出席 5 名 オンライン出席 5 名 委任者 20 名、書面表決者 21 名）
以下、敬称略
出席役員：濵田恒太朗、三本裕子、大坂紫、田川道子
欠席：矢口拓也
出席正会員：小川暁平
出席正会員（オンライン参加）：西島香織、片山新悟、鈴木亮、濱野泰嘉、羽仁カンタ、岸本聡子（途中参加、議決不参加）
マンスリーサポーター：山内陽子（オンライン参加）

４．議決権総数 51 個 有効議決数 51 個（うち出席 5 個 オンライン出席 5 個 委任 20 個、書面表決 21 個）
定刻、司会より、議長として濵田恒太朗を指名することの提案があり、これを諮ったところ全員異議なく承認しました。その後、定足数の確認を行いました。有効出席数及び有効議決権数について確認をし、直ちに議案の審議に入りました。

５．議 事
第１号議案 議決事項１：2020 年度事業報告
各プロジェクト・チーム担当理事より 2020 年度活動報告について説明を行いました。
【議決】
◆賛成 50 個（うち出席 10 名、委任 20 名、書面表決 20 名）、反対 1 名（うち書面評決 1）、棄権 0 名

第２号議案 議決事項２：2020 年度決算
会計担当より、2020 年度決算について説明を行いました。
【議決】
◆賛成 50 個（うち出席 10、委任 20、書面表決 20）、反対 0 名、棄権 1 名（うち書面評決 1）

【質疑応答・意見交換】
※議決の前に、議決事項１及び、２について、合わせて質疑応答を行いました。

濱野氏：今の活動メンバーにおける学生や 20 代の活動メンバーの割合は、どれくらいなのか？
濱田：学生は、2 名。20 代の社会人は、2 名。理事会や事務局も 30 代が多く、40 代のメンバーもいる。

濱野氏：自分が参加していた頃は、学生や 20 代社会人のメンバーが多かった。30 代になるメンバーの関りについて議論したことがあった。当時とは状況が変わっている。これからは、若手をターゲットにしていく構成でやっていくということで了解した。
「若い人がどうアクションしていくのか。」「それによって社会問題を解決していく。」ということをミッションとして掲げていくということでよいのか。
濵田：そうである。
濱野氏：特徴としては、若い世代とアクションがある。そこに対して取り組む為には、学生が活動メンバーに入ってこないと難しいのでは。
濵田：難しいのは確か。コラボ勉強会がきっかけで関わりを持ち始めた 20 代のメンバーもいる。日中 SNS を使って、広報などをしてくれている。ただ、従来の動き方と比較すると、制約が多くなっているとは思う。

濱野氏：以前の若手中心の活動に戻すのか、30 代中心にして活動していくのかなど、幾つかの方向性があると思うが、皆さんは、どう考えているのか？

田川：私が、ASJ に関わり始めたのは 30 代に入ってから。20 代でバリバリ関わっていた方々がいた時代を知らない。30 代になってからでも、貴重な経験ができたと思う。大人でも関わることができる団体という方向性もあって良いのではと思っている。

大坂：普段あまり大学生と関わる機会がなかった。若い人の参加は、増やしていきたい。私も関わったのは、若手社会人の頃だった。コロナ禍でオンラインによってできることが増えた。同時に、同年代と関わりたいという意識もある。

三本：普段大学生と関わる機会もなく、大学生が活躍する場は他にもたくさんあると思っていたが、コラボ勉強会を通じて、大学生の場が必要ということを感じた。将来像として、それぞれのライフスタイルで社会変革ができることが大事だと思う。様々な世代が関わり合って、活動するためにフラットな文化づくりができたらと思う。

濵田：今いるメンバーが活動し易いことが大事なので。オンライン化で遠方からも参加できる、時間帯の変化で、育児をしながらでも参加できる様にはなっている。ただ、世代交代も必要だと考えている。コラボ勉強会などでそういったメンバーをピックアップしていければと思う。

濱野氏：今、活動している人が中心であるべきだと思う。そうでないと続いていかない。5 年先、10 年先を見据えた時に、どういう団体にしていくかということが必要。現在の理事の意向がもちろん大切だが、過去の会員が応援して、寄付を続けているのは、「自分の人生の中で良い経験ができた。」というものを、今の学生にも経験してもらいたいという意思もあると思う。そこをどう両立させていくのかということも大切だと思う。その両面を叶えることができるという活動はやっていったらよいと思う。
iPledge に来る人の中で、A SEED JAPAN 寄りの感覚の人もいるかもしれないし、その逆もいるかもしれないので、お互い受け皿を用意する。今の理事達が同世代と繋がると同時に、若い世代にチャンスを与え、その先に飛び立っていける場所としての役割も大切なのではないか。
財政面を言えば、2020 年度の様な赤字を出しても、5 年間は、継続できる。割り切ってお金を使い、やりたいことをやり、その後考えてもいいと思う。

羽仁氏：30 代や 40 代が、若い人を巻き込んでやっていくことの意義もある。OBOG には、そういった意図もあると思う。コラボ勉強会で入ってくる若者とどう関わっていくか次第、迎える今のメンバーの姿勢次第だと思う。若者を巻き込まないのであれば、独自にやった方が責任も軽いしその方が良い。今解散しても、3 年後に解散しても、同じことだと思うので、もう少しやってみたら良いと思う。

片山氏：理事会の議事録共有を会員にできなかったという説明で気になった点は、整形するのに時間がかかったとあるが、ラフでもいいので会員に共有した方がいいと思う。

濱野氏：OBOG の子供たちをターゲットにした企画もアリかなと思う。高校生くらいであれば、ボランティアに参加を促したりするのもいいと思う。

濵田：30 周年記念等で、そういうのも検討していきたい。

６．報　告
報告事項 1：2021 年度事業計画
各プロジェクト・チーム担当理事より 2021 年度活動計画について説明が行いました。

報告事項２：2021 年度予算（案）報告
2021 年度予算について説明が行いました。

その後、報告事項 1 及び、２について、合わせて質疑応答を行いました。

【質疑応答・意見交換】
西島氏：田川さんが理事に復帰されたことで、私も会員を更新しようと思った。エコ貯金ラボは、い

つまで ASJ としてやるのか？独立の可能性なども含めて。

田川：今年度いっぱいは、ASJ としてやりたい。理由としては、ターゲットにしたい若者、関係者、NPO などが ASJ に紐づいている。OGOB が積み重ねてきたものを積極的に活用したい。活動自体には、大きな資金は必要ないが、若者の活動を支えたいという OGOB の思いにそぐわないのではないかとも懸念している。今年度いっぱいを終えて、若者を取り込んで活動をしていくのか、独立した方が効果的な活動ができるのかを見極めたい。

西島氏：予算の中での 100 万の助成金のイメージについて、具体的なところを教えて欲しい。この規模だと、人件費などに充てられる類のものは、少ないのでは。
予算の立案に関して、もっとシビアに考えて欲しい。会員からの会費は、血税だと思って欲しい。みんな限られた家計の中で、色々な団体に寄付をしたいと思っていると思う。管理費などに関して、もっと減らせるかどうかを今年度中に検討していって欲しい。

濵田：去年度は、立ち止まるということで、赤字予算であったが、今年度は、赤字を減らすために助成金等を申請していくということにしている。

西島氏：助成金は、大概に、事業費に消えてしまう。どうやって人件費や家賃などの固定費を賄うのかが重要だと思う。今年度は、急に事務所を失くすことは難しいと思うし、コロナ禍がどの様に影響してくるかも未知数である。色々な活動の形があるし、助成金等の活用の仕方も様々であるから、色々模索して欲しい。ASJ は、過去の資料は、たくさんある。個人の家に保管してある荷物も沢山ある。何か有効な活用方法があればいいけれども。

濵田：来年度以降の活動の形を考える中で、事務所をなくす、オンライン化する等、今年度考えていきたい。経費の中で、家賃が大きく占めているという認識は、理事会としても持っている。現在、他団体とシェアしている事務所自体も移転する可能性が検討されており、その場合、家賃が今よりも下がる可能性もある。

羽仁氏：事務所は、今どの様に使っているのか？コロナ禍以前の事務所の雰囲気は、ごった返していたのか。

濵田：事務局スタッフが、週に 3 回ほど勤務に使っている。コラボ勉強会や理事会等で月 2、3 回程度使っている。

小川：もともと人が沢山いるようなフロアではない。単独で事務所が借りられないけれども、住所や電話を持ちたい団体の為に、始まったオフィスなので、そもそも常勤のスタッフがいる団体の方が少な

い。コロナでさらに減ったというイメージ。気候ネットワークなどは、コロナを機に、テレワークの可能性を実感し、座席数を減らした。

羽仁氏：それくらいの頻度であれば、今後 3 年くらいで計画立てて、収支を回復させていくようにしたらよいのでは。

濱野氏：現時点では、エコ貯金ラボが中心に、派生した ESG ウォッチプロジェクトがあるが、それらが独立する可能性はあるのか？また、今後プロジェクトのテーマが増える可能性があるのか？
濱田：エコ貯金ラボとしては、独立する可能性は、考えているが、ESG ウォッチプロジェクトとしては、話しには出ていない。今後、プロジェクトのテーマが増える可能性は、ある。

濱野氏：活動をするにはヒト・モノ・カネが必要。カネは、そこそこ貯蓄がある。モノは、何をやるのか。ヒトの部分をどのように広げていくかを考えないといけない。また、どういう活動を展開していくのかということ、どう増やしていくのかを、1 年間固めていけると良いのではと思う。30 周年プロジェクトは、きっかけになるのでは。理事やコアメンバーが背負ってきて、周りに助けを求められなかったものを、上手く OGOB を利用してやっていければいいと思う。若い人達を受け入れていって、その人達が、自由に活動ができる様になればいい。過去の活動を参考にして、現在にバージョンアップするのもいいと思う。当時のアジアツアーなど。単発的な取り組みから次につなげるという方法も検討してみてはどうだろうか。あと、今の若者が何を求めているのか。飛び込んで来やすい活動を用意しても良いのでは。

濱野氏：活動を、今後継続することに、心理的負担はないのか。どれくらい続けるイメージなのか。今のタイミングで理事にいることが、こういう状況になってしまっているのかもしれない。皆さんの苦しい胸の内を知りたい。言える方がいれば聞きたい。

濵田：ASJ の代表になって、3、4 年経っている。以前は、毎年代表が変わっていた。世代交代ができず、固定化してしまっている。この先をどうしていくのか、難しさを感じている。3 年くらいで形にしていく必要はあると思ってはいる。

濱野氏：今まで続けてきてくれた皆さんには色々な想いもあるだろうし、プライベートもあるわけで、貴重な時間を割いて、参加しているわけで、この機会に聞いてみた。

田川：組織として、一部スタッフやメンバーに過度な負担を与えてしまう傾向があるように感じる。有給スタッフの働き方を見たり、過去の話を聞いていると、体や心を壊して辞めていった話を聞いていた。理事としても負担が多く、体の調子が悪くなったこともある。それは、健全なのかと当初から感じていた。過去の OGOB 達も考えも分かるが、ライフワークバランスは、昔とは違うのでは。ASJ を残すための活動では意味がない。活動がないのであれば、団体として存続する意味はないのでは。

濱野氏： NPO 法人になったり、学生が減ったり、違う意味での活動の重圧もあるのであろう。昔よりも、今の状況を踏まえて議論したらいいと思う。

大坂：ASJ からだいぶ離れていたので、色々な意味で余力はあると思う。3 年先などのビジョンとしては、あまり考えていなかった。他のメンバーとここ数年の状況を知らない分、温度感が違うとも感じている。

三本：故郷のような存在なので守りたい。次の人に渡していきたい。もし閉じることになった時に、それをする人がいないのであれば、私が行おうと思っている。

濱野氏：OGOB に呼びかけて、今できることがあるのではとなった時に、「こういうことを一緒にやりませんか？」というのも良いのでは。正会員という意識が薄かった。スプリングは、そもそも寄付の為のシステムだったと思うが、正会員も含まれるシステムになった。正会員＝活動会員というイメージだったが、それも変わった。活動会員のイメージではなくなってしまった。そういう風に思っている人もいるかもしれない。「何か一緒にやって欲しい。」という時に、声掛けするのもいいと思う。高齢化するかもしれないが。皆さんだけで背負わなくてもいいのでは。皆さんが疲れてしまわない様に。

濱田：確かにそのように、声掛けしていければいいと思った。

鈴木氏：維持するのが大変なのであれば、30 周年で解散もありと思う。何か自分でも企画を検討する予定。学生をとりまく環境など完全に時代が変わっている。色々な社会問題があり危機的な状況になってきている中で、勉強会をしている場合ではない。やりたい活動があって、その上でのメンバー募集である。どうしたら人が入ってきて、どうしたら活動が生まれるかと考えていること自体が終わっている。組織をどうこうというタイミングではなく、活動できないなら解散でもいいと思う。

岸本氏：皆さんの温度感を知りたくて、参加した。社会にメッセージを放って解散ということでもいいと思う。社会はめまぐるしく変わっている。海外からみても、日本の問題は、かなり深刻で切実なことがたくさんある。団体など関係なく、社会に必要なことを訴えている人は、沢山いるし、手段は沢山ある。参加する場所も沢山ある。組織ということにこだわらずに、社会参加を促すことも可能だと思う。30 周年をうまく使ってほしいと思う。解散するのであれば、いいタイミング。 OGOB の中で、ASJ を続けて欲しいという声は、あまり聞かない。今の理事だけが背負わずに、来年度会員総会で、議決を取ってもいいと思う。

報告事項３：2021 年度役員について
2020 年度役員（浜田、三本、江口、大坂、矢口）を紹介した後、理事会で承認された 2021

年度の役員、浜田恒太朗、三本裕子、大坂紫、田川道子、矢口拓也より、担当分野および意思の表明を行いました。

浜田：去年度は、試行錯誤してきて、新たな人が関わる中で、今年度の動きを作っていければ。学生や若い社会人との繋がりを持っていくことを大事にし、全体のことも考えつつ、行っていきたい。

三本：新しく活動する理事が生まれてきたらいいと思っている。法人格をなくすことや解散の選択肢も含めて、皆さんと話していきたい。

大坂：30 周年で解散というモチベーションで、理事になったわけではない。そういった意見が多いのであれば、解散という選択肢も頭に置きつつ頑張りたい。OGOB の意見を聞きながら、30 周年を成功させたい。

田川：今日貰った意見を踏まえて、自分が問題だと感じていること、社会に訴えていきたいことを、1 人でも多くの人に届けたい。プロジェクトで、若者や NGO・NPO 関係者に役立つ情報を発信して、一人でも多くの人が社会を変えたいと思えるようにしていきたい。

矢口（欠席・代読）：
「引き続き監事を務めさせていただきます矢口拓也です。 令和 2 年度は新たな試みであるコラボ勉強会がオンラインで開催されるなど、アシードの現状とコロナ禍に対応して、今後に向けての動きが生まれました。 ただ、 財政的に厳しい状況は変わりません。組織としての持続可能性をなお一層模索しながら、大きく変わろうとしている社会にアシードならではの存在感を発揮し、今の若者を巻き込んでいけるような組織を作っていけるよう協力していきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。」

江口（退任理事）（欠席・代読）：
「2018 年度より理事として、復帰しておりましたが、仕事やプライベートの多忙により、理事の継続が困難を極め、退任する判断をいたしました。 理事は、退任いたしますが、過去 3 回関わらせていただいたコラボ勉強会や SDGs 関連で、スポット的に今後も関わっていければと思います。 変化が激しい時代の中で、今後も社会を変革し続ける組織であることを期待します。」

【参加者からのコメント】
濱野氏：関われていなかったが、皆さんが頑張っていたことに感謝したい。まず一年一緒に頑張りたい。それでどうなるか。30 周年プロジェクトの中で、解散となるかもしれないが、それも含めて議論をしていければと思う。それぞれの場所で頑張ることが大事。続けることが大事。昔のメンバーにも連絡可能だし、協力できるので、活用して欲しい。これまでお疲れ様でした。これから一緒に頑張りましょう。

片山氏：消化しきれていない。継続が良いのかは、解散かどうかは、分からない。NPO・NGO 業界に深く関わり、バリバリ活動する人もいる一方で、自分のように一般的な会社員としても、簡単に関われるというのも ASJ の魅力だとは思うし、貴重なのでは。自分のような立ち位置で、ここ 1 年は関われたらいいと思う。

羽仁氏：片山氏の様な緩い感じで関われるというニーズもあるのかなと思う。社会人になってから、ガチで関われる団体は、たくさんあるが、緩く関われる団体は確かに、少ないのでは。ただ、だとしたら、国際青年環境 NGO の看板は下げたほうが良いし、何か違う看板を考えても良いと思う。
寄付を貰うのは、辞めてもいいかなと思う。コロナ禍で自分も収入が減って、他団体への寄付を断ったりもしている。そういった人もたくさんいる。元々あるお金を上手く使ってやっていくのもあり。30 周年で色々なアイデアや人が集まるので、一つのステップにしては。
岸本氏の言った通り、ツールや団体は沢山あるので、ASJ がなくても若者は、困らない。ただ、ASJ の視点を若者に伝えていくことには、凄い価値がある。エコ貯金など。先日 OB が学生にお金の話をしたが、学生達にとって有意義だったようだ。学校でも教えないし、全然分かっていない。その流れを 30 周年から 3 年くらいのスパンで考えても良いのでは。注目を集めて、資源も集めて、3 年頑張ってみたらどうか。それでダメなら辞めればよいのでは。若者のムーブメントや活動は、活発になりつつある。刺激し合えたらいいのでは。

西島氏：羽仁氏に同意するところが多い。若者にとって、自分の意見を発するというコミュニケーションが大事だと、浜通りに来て感じている。そういったことで、新しい価値観が生まれる。そういう場を ASJ が作れるんじゃないかと思う。ASJ らしいやり方があると思う。とはいえ、期限を決めて、緊張感を持ってやるのが大事なのでは。

鈴木氏：仮に解散を決議しても関係が切れるわけではない。流石 ASJ という潔い解散の仕方が、これまでの実績に対して、相応しいのでは。ガチの人と緩い人とがうまくやるというのは、良いことだと思う。会費をもらわないというのは、賛成であり、それで楽になる部分もあるのでは。

山内氏：ゆるく関わるというニーズは大事だと感じている。私自身がそうである。それを支える団体の運営は、相当きつくなってきていると思う。期限を区切って閉じるという方法もあると思う。国際環境 NGO という看板と実態は合わなくなってきている。会費をもらわないというのは、賛成。OGOB のネットワークは、継続・解散に関わらず大事にしていってほしい。お金と環境というのは、大きなテーマで、ニーズもあり、大事なイシューで、ASJ でずっとやっていくのか、別の形を模索するのかどうかも要検討だと思う。

岸本氏：コラボ勉強会は良いと思う。ASJ の卒業生で色々と活躍している人も多いので、リソースを提供し合うよう、取り組んでも良いと思う。寄付したいという団体は沢山ある中で、ASJ を続けてい

くようにしていければとも思う。

７．議事録署名人の選任

議長より、議事録署名人として、田川道子と大坂紫の 2 名を指名したいとの提案があり、これを諮ったところ全員異議なく承認されました。

以上の報告を持って、議長は 17 時 00 分閉会しました。

以上